

二〇一九年、中国を発生源と考えられる新型コロナウイルス（COVID-19）が世界的に流行し、日本においても、二〇二〇年から生活の在りようが大きく変化した。その影響は日本口承文芸学会も無縁ではなく、二〇二〇年三月の研究例会は延期、六月の大会はウェブ大会として八月に研究発表のみを行う形となった。

機関誌委員会ではこうした状況に鑑みて、以下のとおり「緊急特集」を組み、投稿原稿を広く公募することとした。

\* \* \*

【口承文芸研究】第44号緊急特集への投稿公募について

この状況下において、会員の皆さんが耳目した事象や直面した出来事、研究者・語り手・学会員として考えることなど、ぜひ多くの方にご寄稿いただければありがたいです。

公募テーマ：緊急特集 新型コロナウイルス流行の下で（仮

例 コロナ流行下で耳目したウワサ・ハナシなど

（国内・海外問わず）

各フィールドにおける疫病をめぐる伝承など

コロナ流行下で直面した出来事

（研究・調査環境、伝承環境の変化）など

口承文芸研究や学会のあり方について

（対面からインターネットを介した

コミュニケーションへの変化

こうした状況に学会としてどのように

対応していけばいいか）など

## 緊急特集 「新型コロナウイルス流行と口承文芸研究」 に当たって

結果、日本国内のアマビエ論をはじめとする二〇二〇年のリアルな事例報告、アイヌ、台湾、韓国、ロシア、イギリスを含む疫病などにもつわる論考と、九本の多彩な投稿を寄せていただけた。公募の形を採ったのは、かつての民俗学において、雑誌を介して新しいテーマを寄せ合ったことを意図してのものである。大会発表の内藤浩登論文も、本特集とつながるものと言えるだろう。

併せて、学会としてどう対応したかを記録に遺すことも意義があると思ひ、会長はじめ、大会委員会、例会委員会、会報委員会の立場からの文章を寄せていただいた。さまざまな思いを抱いて、学会運営に当たってくださっていることが知れる。

口承文芸は、取り立てて、対面による「語る／話す／歌う」―「聴く」という関係性において成り立つ領域である。新型コロナウイルスは、こうした基本的なコミュニケーションの在りようを、大きく変容させるものとなった。SNSやオンラインといったコミュニケーション手段が発展し、情報伝達の方法や、それに伴う身体の在り方も、変わらざるを得なくなった。口承文芸という観点でこのような問題を思考・発信していくことは、重要な社会的意義があると考えた。

本特集が、今後の何らかの羅針盤の役目を果たすことを希って止まない。

機関誌委員長 根岸英之（ねぎし・ひでゆき）

### 【緊急特集 新型コロナウイルス流行と口承文芸研究】 感染症流行下で開催された初のウェブ大会

問宮 史子（大会委員長）

二〇二〇年度の第四十四回大会は、新型コロナウイルス感染症拡大の影響で、ウェブ大会という異例の開催となった。以下、本学会初のウェブ大会の顛末を記す。

今大会は本来、六月六日・七日に東京都の高千穂大学で開催される予定で、大会委員会（加藤耕義・熊野谷葉子・問宮史子）は準備を進めた。公開講演およびシンポジウムのテーマは「神話と昔話―女性神をめぐる―」、講演者は三浦佑之氏と渡邊浩司氏、シンポジウムのパネリストは沖田瑞穂氏、北原モッコトウナシ氏、坂井弘紀氏ということに決まる。二月初めに研究発表募集を通知し、三月の運営理事会で応募研究発表の採否を決定するはずだったが、三月十四日の第七十八回研究例会の実施が見送られたのに伴い、運営理事会はメール審議で行われた。メール審議による審査結果を受けて、研究発表会のプログラムを組み、十三名の発表者に連絡したのは三月末。連絡メール末尾には、「今後の新型コロナウイルスの状況がどうなるかわかりませんが、大会委員会と大会会場校は、現時点では、第四十四回大会を無事に開催できるよう祈りつつ準備を進めております」

と記した。この時点で、今後の状況次第では大会参加が難しくなるかもしれないという発表者もあり、大会開催について、大会会場校の立石展大会長と相談したうえで、然るべき時期に判断しなければならぬと考えた。

四月初め、日本独文学会の情報が寄せられる。独文学会は、本学会と同じ六月六日・七日に予定している春季研究発表会の開催中止を検討しているようだとのこと。私たちも開催についての方針を早急に決定するべきだと大会委員間でやりとりするうち、四月七日、七都府県に緊急事態宣言が出された。緊急事態宣言を受けて、まず立石氏と次のことを相談する。

一 六月の大会開催は断念する。今年度中の延期は日程上困難と思われるので、講演とシンポジウムは来年度の大会で行う。

二 一方、若い研究発表者の発表機会を確保するべきである。その場合、

A 研究発表者に機関誌への投稿を勧める。／B 研究発表の場を秋にでも別日程で設ける。／C 研究発表の場をネット上に設ける。

大会委員会としても、一については、登壇者の承諾を得たうえでその通りにしたい、講演とシンポジウムは、その場で多くの人に聴いてもらうことが大事だ、と考えた。

二についてはどうするか。B案は秋の学会シーズンと重なり難しいと思われるため、機関誌への投稿を勧めるA案がよいのでは、と考えたのだが、投稿が不採用となると、発表の場は失